

若者との交流

理事 那須基

最近、内定式を終えたばかりの大学生グループと交流する機会があった。

私は全く向いていないが、もし教職にでも就いていればそのような若者たちと日頃から接する機会に恵まれたかもしれない。私の職場にも20代の若手職員はちらほらというが、それでも数人のグループと数時間にわたって話をする機会となると、いつ以来か思い出せないくらい稀有な機会になったと思う。

私と同世代の方なら同じような感想を持つだろうと思うが、彼らは若い。ひたすら若い。とにかく若い。若さに対してそこまで羨ましいと思うほどは老いぼれていないつもりだった私も、実際に交流してみると、社会に羽ばたく希望に満ちた彼らのエネルギーに眩しさを感じずにはいられなかった。

たまたまなのかも知れないが、今回交流した諸君は非常に折り目正しく、彼らの言葉の端々に現代の若者の言葉の息吹を感じ、同時に昭和から残る挙動も感じられ、とても自然に時間を過ごすことができた。要するに、私が一方的に利己的な時間を過ごすことができた訳だが、もし私から彼らが何かを感じ取ってもらえたとしたら非常にありがたいことだ。



ところで、私が本倶楽部の会員になった時、諸先輩の皆さまから年齢を聞かれて「若い若い」と言われて、その頃はあまり若いと言われる機会がめっきり減っていたものだから、

とても良い気持ちになったものだが、今回の若者との交流を機に感じたことがある。それは若者に期待される役割だ。

本倶楽部でも近い将来に大きな課題となる世代交代や、若手にしかできない柔軟な意見の提案など、若者に期待される役割は世代に関わらず変わらないものかもしれない。今回の交流の場でも、4年生のメンバーが言っていたことのひとつは、自分たちの活動を1、2年生の下級生にどのようにバトンを渡すかであった。

そう考えると、30年勤めた職場をリタイアしてからは後輩に何を残せるかを考えてきた私も、まだ若手として期待されて振舞えることもあるのかもしれない。自分が若者に何を伝えられるか、と同時に、何を求められているのか。その両面から将来を考える良い機会になった。

会員だより

徒然水草 其之拾六 「若者は忍者を目指す」

嫌気好気法師

この夏も猛烈に暑かった。「酷暑日」という新用語が大活躍した。この数年、「今年の暑さは異常だったのだ。来年はこんなことはないだろう」という儚い期待はあっさりと裏切られつづけ、今や、夏はこれくらい暑いものだという厳しい現実を受け入れざるを得なくなっている。

酷暑に対応すべく、様々なグッズが販売されている。良く見るのはファン付きウェアだ。登場した時は工事現場でしか見かけなかったが、今では街中で普通に目にする。最近は水冷式もあるらしい。ハンディファンも、最早、若者達の夏の必須アイテムのようだ。そんなものを使わなくても、我国には扇子という優れモノがあるではないかと思うが、扇子でバタバタはダサイのだろうか。我々年配者は、頑張っって日本古来の伝統を守りたいものである。

さて、ひとつ不可解なことがある。それは黒ずくめの若者がやたら多いことだ。「黒色は光を良く吸収するので熱くなる」というのは小学校で習ったはずだが、黒い服を着てハンディファンを持って、「暑い、暑い」と言っているのは理解しがたい。

「夏は白服」というのは、もはやオジさんの発想なのか？何でも知っているチャッピー君に聞くと、「黒は服選びの労力を最小化できる色」「黒い服は自信や力、コントロール感を得やすく、身体を細く見せる」「有名デザイナー達が黒を好んで着る」「他の色と合わせやすく、汚れも目立たない」等の回答が出てくる。何だか後付けのような気もするが、とにかく街ではここ数年、やたら黒色ファッションが目立つ。

職場でも、若手はほとんどが上下黒一色で、誰が誰だか見分けがつかない。そもそもファッションとは、自分を素敵に見せ、目立たせるための行為ではないのだろうか？黒づくめだと人目を引くどころか、忍者や「くノ一」みたいで、なるべく見つかないようにしているとしか思えない。

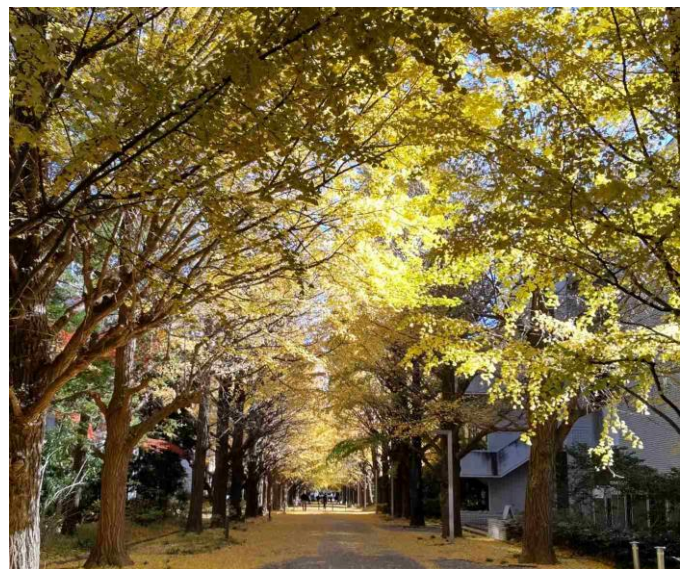
数年前までは、猛暑の中、何故か毛糸帽子をかぶっている若者達がいたが、さすがに最近は見なくなった。ファッションだったのだから、麦藁帽子ならともかく、酷暑に毛糸帽子は、もう命がけだろう。「夏でも黒」もいずれは廃れると予想する。

筆者は通勤で新宿駅を通るので、外国人観光客を多く見かけるが、黒い服装が多いという印象はない。黒色ファッションが悪いなどというつもりは毛頭無いのだが、もっとカラフルな服装の方が、街の雰囲気明るくなり、日本も元気になると思うのだが、如何なものでしょうか？

編集幹事のあと整理

- 那須理事の「若者論」。いまでも那須氏を若者だと思っている編集幹事子です。若者ってこのように相対的な言葉だったのですね。
- 村上嫌好法師からの其之拾六は暑い夏に関する話題。ところでこの夏から気象庁は「酷暑日」（最高 40℃以上）の区分を上乗せしました。それが皮肉にもこのところの毎年の夏より「暑くはなかった」と感じる編集幹事子です。むしろ雨が多い夏だった。雨が降ると暑さが少しは和らぎます。また晴れて雲がなければ直射日光がギラギラ暑いからですね。
- 会員日よりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月



東大駒場キャンパス銀杏並木の陰影(先年 12 月)